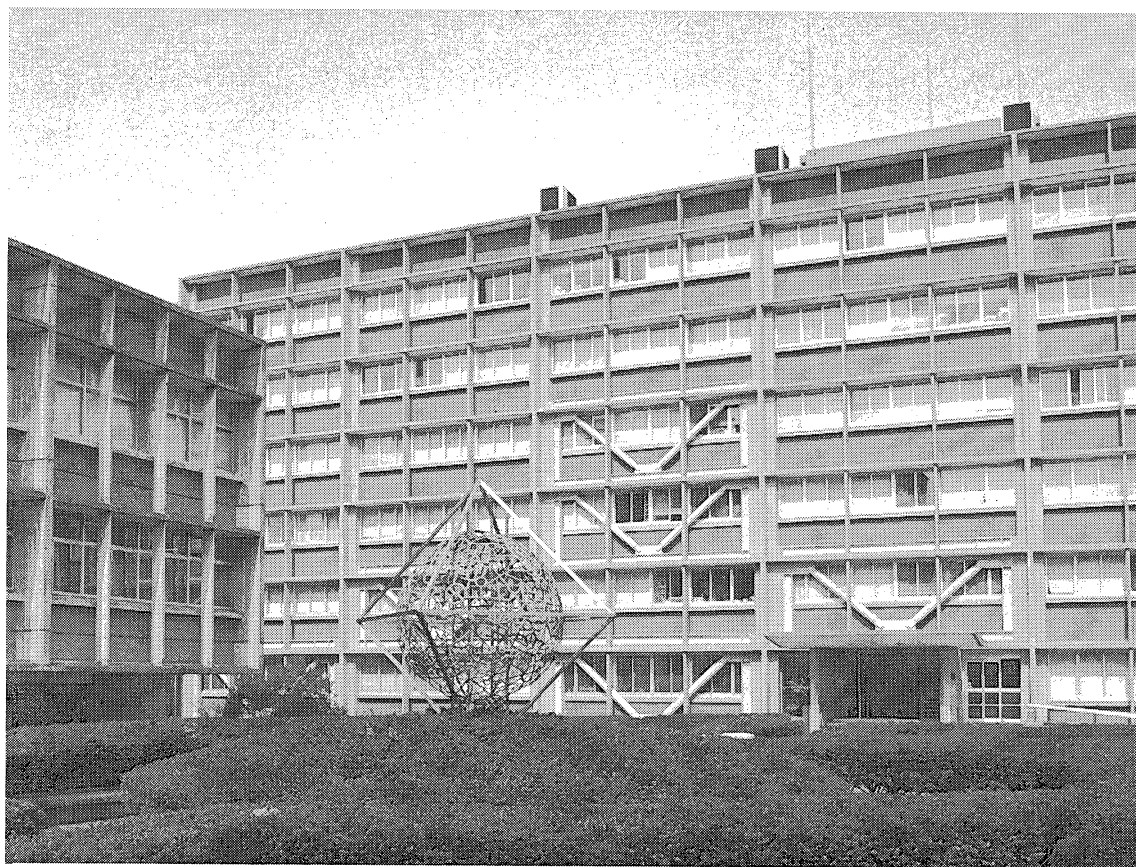


8. 南山大学史料室



史料室のある第一研究室棟（アントニン・レーモンドによる建築）

基本データ

開設年月日：2005年4月1日

所在地：〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 名古屋キャンパス

第一研究室棟地下1階（B108）

HPアドレス：<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/archives/>

刊行物：『アルケイア』、『南山アーカイブズニュース』（南山学園史料室刊行）

『南山学園史料集』（同）

資料配架棚総延長：346m

専任職員：教育職員1名、事務職員1名

調査日 2011年9月12日

場所 南山大学史料室

お話しいただいた方：史料室担当教員 永井英治氏

調査者 上崎哉（記録）、酒勾康裕（写真）、田窪直規

1. 南山大学における大学アーカイブズについて

1-1 設置目的・設置経緯

——学園史・大学史編纂資料の整理と事務文書の統一的保管の必要性——

南山大学で大学史料室を設置した目的としては、年史編纂終了後の収集資料の整備・利用と、大学全体での事務文書の統一的管理が挙げられている。

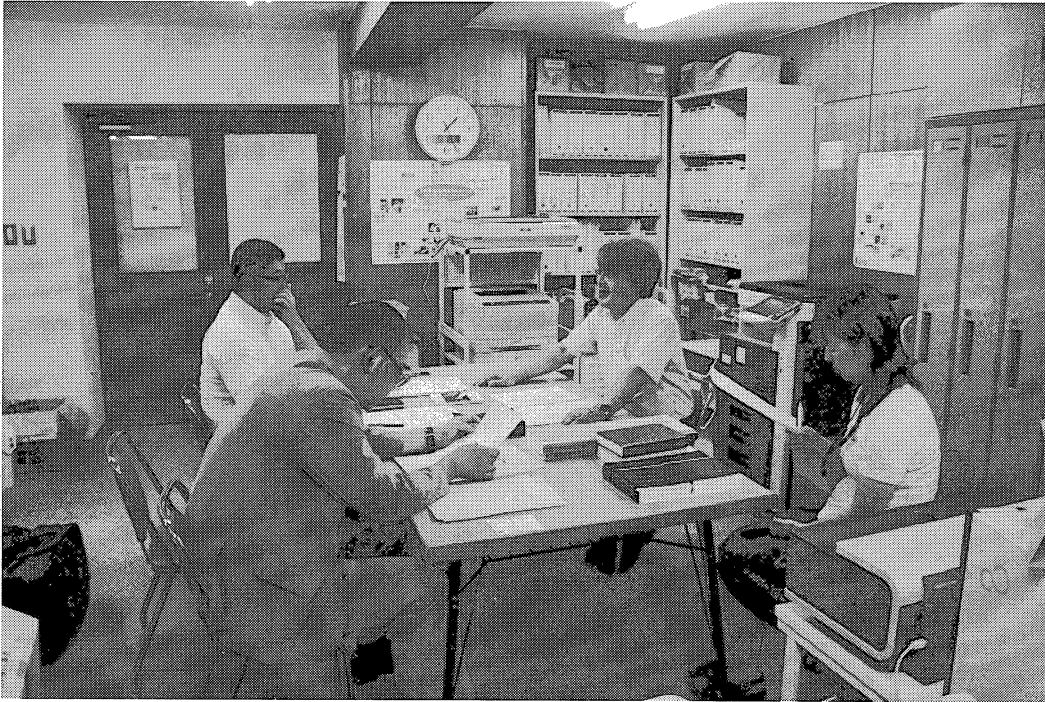
まず前者についてであるが、南山学園では、1964年に『南山大学の歩み』がひとりの熱心な職員によって編纂されたが、その後の資料整理のために、1993年、学園全体の史料室として南山学園史料室（以下「学園史料室」とする。）が法人事務局内に設置された。その後も2001年に『南山大学五十年史』が編纂されたが、編纂終了後の管理を担当するはずであった大学総務課に担当者が不在であり、管理体制は不十分なものとなった。ただ、1999年から計画された『南山学園創立75周年記念誌』の編纂事業において、実際の編纂活動を担う大学教員の活動拠点として、大学総務課所管の史料室を整備・利用することとなり、大学史料室は再活性化した。

一方、事務文書の管理については、大学事務文書の保管を検討するプロジェクトチームが設置され、そこにおいて、「大学の事務文書の統一的保管」の必要性が答申された。こうして、大学アーカイブズの機能を併せ持つ施設として、2005年4月1日、南山大学史料室（以下「大学史料室」とする。）が設置された。プロジェクトチームには、図書館職員が事務局として参加し、まとめ役となってくれたことも大きく寄与した。

大学史料室は、組織アーカイブズの機能も重視しているため、史料室という名称が機能に即して適切であるか疑問の余地があるが、「史料」の重要性という「説明」によって存在が認知されていく側面があるとのことであった。

1-2 組織形態—学園史料管理を牽引する役割も—

南山大学史料室の一つの特徴としては、法人全体を対象とする学園史料室と併存していることが挙げられる。更に、単に組織上分かれているだけではなく、大学のキャンパス内に大学史料室が設置され、学園史料室は学園発祥の地である「いりなか」の法人事務局内に置かれている。このため、両史料室間の頻繁な行き来が難しい。また、現在の学園史料室は規模が小さく、そのため、実質的には大学史料室が学園全体の文書管理を牽引する役目を背負っているとのことであった。



調査風景

次に大学史料室の構成であるが、教育職員と事務職員の二人体制で、臨時職員が1名である。このうち教員については、永井氏が大学史料室開設後、大学史料室担当教員として任用されている。一方事務職員については、専任職員の場合、専門職として位置付けられておらず、異動によって人員が交替することもあるとのことであった。

次に、博物館と図書館との連携についてであるが、博物館とはかつて合併案があったが、計画していた施設が老朽化していたため、実現しなかった。また、新棟建設に伴って博物館との合併も検討課題には上ったが、スペースの関係で実現しなかった。南山大学の場合は、人類学を専門とする博物館なので、大学史料室との連携には難しいところがあるとのことであった。一方、図書館との連携については、図書館職員と何度か意見交換は行っており、問題意識は共有されている。ただ、図書館は事務職員から構成されている組織であるため運営の点で相違するところがあり、博物館、図書館そして大学史料室のMLA連携にまでは至っていないとのことであった。

第4に、大学史料室に関する種々の規程であるが、「南山大学史料室規程」、「南山大学史料室運営委員会規程」そして「南山大学史料室利用規程」の三つが策定されているとのことである。

1-3 活動内容——大学教育との連携——

大学史料室の活動には、①非現用となった大学業務文書の移管・整理・公開、②南山大学史に関わる資料の収集・整理・公開、③資料集（南山学園発行）・紀要（大学史料室発行）の編纂や大学教育との連携などがある。

これらのなかで中心となる①の業務については、文書配布を行うなどして事務職員への呼びかけを行い、将来的には文書作成段階からの文書管理システムを模索している。移管はやはり年度末・年度初めが多い。評価選別については、内容まで精査せず、重複以外は可能な限り捨てないという方針に立っている。

大学史料室での業務文書整理により、現状においても、支援的ファイリングシステムによる効率的業務運営というメリットが大学業務に提供されており、実際に大学史料室に移管された文書の参照や、再提供が行なわれている。これらは年次を追って件数が増えているものの、学内での認知度は十分ではないとのことである。

次いでその管理方法であるが、件名までは目録を作成しておらず、ファイルレベルのものに止まっているとのことであった。ファイルの上位のまとまりについては、現秩序主義に立って記録した上で、内容に応じて配架している。内容別の配架であっても、現秩序の追跡は可能な仕組みとなっている。ファイル目録については、将来的には Web 上で公開したいとのことである。

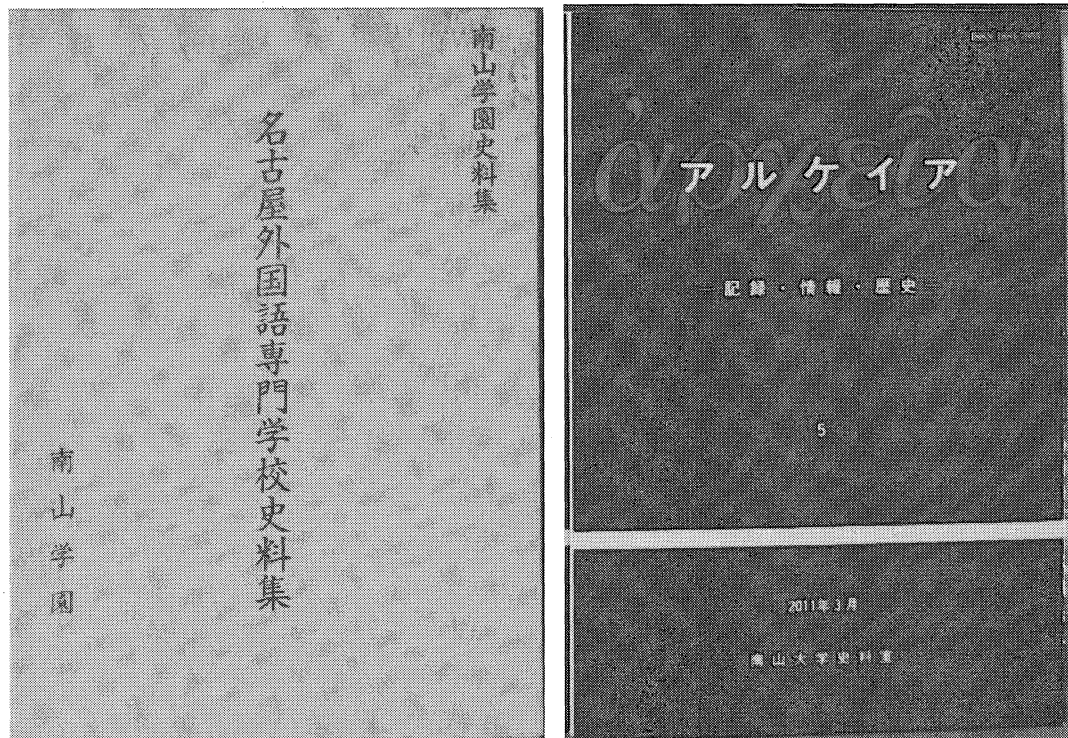
また、電子文書については、現在では事務システムの部署でサーバーを管理しており、将来的には、非現用化した段階で移管するか、大学史料室がアクセス権を持つようなシステムを目指したいとのことである。ただし、南山大学の現状では、重要文書は紙ベースで運営されているため、現在の電子文書の内容は、業務としては限られているであろうとのことであった。

②の南山大学史に関わる資料の収集としては、卒業生に資料提供を呼びかけるとともに、退職予定の教員にも呼びかけ、その教員の研究室にある資料を積極的に受け入れているとのことであった。

次に、これらの文書の公開についてだが、上位機関の判断によらなければならない場合もあり、個人情報については大学のルールにしたがって保護しているが、これらに抵触しない限り、原則的に公開する方針に立っているとのことであった。書庫は開架に近いスタイルを採用しており、公開／非公開の判断をしなければならないファイルについては、「注」の印を付している。ただし、非公開とする場合にも、部分公開を行っているとのことであった。また、文書の状態などにもよるが、複写にも応じているとのことであった。

そして、史料室の活用状況であるが、全体の利用人数が年間 100 名程度で、その内 7 割が学生とのことであった。学生利用の促進については、システムティックな取り組みは実

際上難しいが、永井氏と個人的なつながりのある教員を中心に活用が広がりつつあるとのことである。今年度については、博物館実習で60年代の学生運動の時代について展示を行ったところ、好評とのことであった。



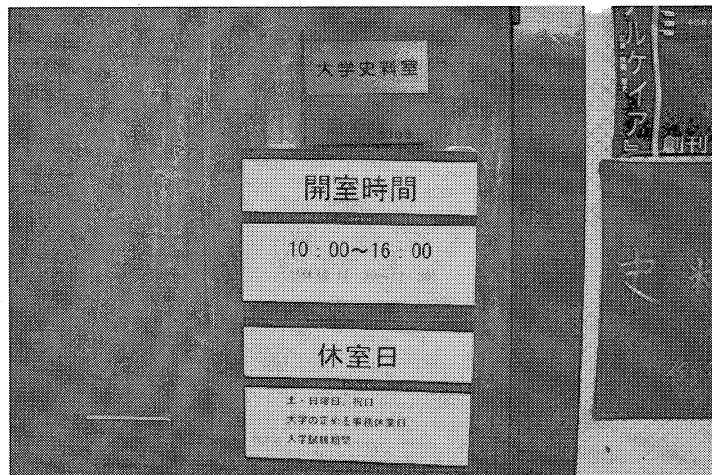
『南山学園史料集』と『アルケイア—記録・情報・歴史—』

③の業務では、史料集『南山学園史料集』（学園史料室刊行）と紀要『アルケイア—記録・情報・歴史—』の編纂を行っている。また、南山大学では「大学文化論」が大学史教育の役割を果たしているとのことであった。元々当科目には、アイデンティティの認識と大学史資料を素材として扱うという二つの方向が存在していたが、後者は発展が難しいため、前者にシフトしつつあるという。そして、この講義の受講生が大学史料室を利用する事例も増えている。

一方、学生以外の利用としては、①教員が研究などのために利用する事例、②南山大学のグランドデザインを担当したアントニン・レーモンドの建築に関心を持って大学を訪問した人が足を延ばすケース、③サークルのOBや関係団体が記念誌を作成するために利用する事例、④職員OBやその家族が足跡を辿ったりするために活用する事例、などがある。

2. 南山大学及び私立大学にとっての大学アーカイヴズの意義 —社会的責務としての情報公開—

永井氏のお考えとしては、社会において公的役割を担っているという点では国公立大学も私立大学も相違はなく、私立大学としても非現用となった業務文書等を可能な限り公開するのが社会的責務とのことであった。すなわち、単に内部利用のために業務文書等を収集・管理するだけでなく、最終的にそれを公開することに大学アーカイヴズの意義があるのであり、国立大学のような法的根拠を持たないからといって、私立大学がこのような社会的責務を回避することはできないと考えているとのことであった。



史料室入口

調査を振り返って

モダニズム建築に偉大なる足跡を残したアントニン・レーモンドによってグランドデザインが描かれた南山大学のキャンパスは、丘陵地の起伏を生かしながら木々の中に建築物が埋もれ、落ち着きと居心地の良さを感じさせる場所である。こうしたキャンパスに設置されている南山大学史料室もまた、規模としてはこじんまりとしたものではあるものの、大学の中においてしっかりとした位置づけを確保して、必要とされる機能を果たしているように感じられた。大学にとって価値ある文書の組織的な保存管理という大学アーカイヴズに期待される機能を鑑みれば、長期的には南山大学のあり方に収斂していくことになるのであろうか。

(上崎哉)